

## 継子のこやし運び

当山 ウシ (1899・M22) 字長浜 (01:03)

井戸<sup>かー ぶ</sup>あ掘<sup>みじぐえー かた</sup>たるむのーあらんやー、うぬ水<sup>みじぐえー</sup> 肥<sup>かた</sup>る担<sup>かた</sup>みとーしが。

あんさーに、うぬ水<sup>みじぐえーちゆかた</sup> 肥<sup>む</sup>一担<sup>む</sup>み持<sup>は</sup>ち行<sup>は</sup>いねー、  
今度<sup>くんど</sup>おまた、一担<sup>ちゆかた</sup>め一其処<sup>うんま</sup>んかい水<sup>みじい</sup>入<sup>みじい</sup>とーるばー。  
臭<sup>くさ</sup>ぬ中<sup>み</sup>ぬんかい水<sup>みじい</sup>入<sup>みじい</sup>ったぐとう、なーまたちやー同<sup>ゆ</sup>  
ぬさ。又<sup>また</sup>ん担<sup>かた</sup>みてい行<sup>は</sup>いねー、又<sup>また</sup>ん一担<sup>ちゆかた</sup>め入<sup>い</sup>っ  
てい。やぐとう、なー十<sup>とうかた</sup>担<sup>む</sup>み持<sup>む</sup>ちーねー、其処<sup>うんま</sup>ん  
か十<sup>とうかた</sup>担<sup>い</sup>み入<sup>みじ</sup>っちょーるばー、水<sup>みじ</sup>ぬ。

なー、あり分<sup>わ</sup>かとーてい、「其処<sup>うんま</sup>あ湧<sup>わ</sup>くぬ在<sup>あ</sup>るむん  
なー、担<sup>かた</sup>みていん減<sup>ひ</sup>ならん」、うりやるばー。水<sup>みじぐえー</sup> 肥<sup>みじぐえー</sup>  
ぬる一戻<sup>ちゆむる</sup>し持<sup>む</sup>ち行<sup>は</sup>いるかーじ、自分<sup>どうー</sup>ぬんな水<sup>みじ</sup>、  
其処<sup>うんまい</sup>入りやーに、又<sup>また</sup>ん多<sup>うふ</sup>くなたしえー、なー担<sup>かた</sup>みて  
いん減<sup>ひ</sup>ならん。なー見<sup>うん</sup>らん 間<sup>まー</sup>る入<sup>い</sup>りーぐとう、てー。  
「いやー入<sup>い</sup>ってーさやー」んち、喧嘩<sup>おー</sup>いんならんしえ  
ーや。

あんぐとう、担<sup>かた</sup>みーるかーじ湧<sup>わっ</sup>ちゃぐとう、なー  
う<sup>う</sup>終わ<sup>ま</sup>いげー間<sup>にじゆーかた</sup>ねー二十<sup>む</sup>担<sup>とうかた</sup>みが持<sup>む</sup>ちやらー、十<sup>かた</sup>担<sup>かた</sup>  
みが持<sup>む</sup>ちやらー分<sup>わ</sup>からんしが。うりんよ、なー担<sup>かた</sup>  
みらさんれーならんしえー、大<sup>いっペー</sup>変<sup>い</sup>しーら入<sup>い</sup>りらんれ  
ーならんしえー。

## 【共通語訳】

井戸を掘った話じゃないよ、継子に肥溜めから水肥を担がせた話なんだがね。

それは、継子が水肥を一回担いで持って行くと、今度は継母が、担いで行った分の水を肥溜めに入れたようだ。担いだ分の水を入れるので、水肥はずっと同じで減ることはない。担いで行くたびに、その分の水を入れるんだからね。十回担いで持って行くと、十回分の水を入れるということさ。

継子はそれに気づいて、「そこには水が湧いているのかな、いくら運んでも減らない」と思うが、どうしようもないさ。継子が水肥を担いで行くたびに、継母がそこに水を入れるから、どんなに担いで減ることはない。継子が見てないときに入れるんだから、「入れたでしょう」と、反抗もできないでしょう。

だって、担いで行くたびに水を入れるので、もう終わるまでには十回担いだのか、二十回担いだのか分からない。それもね、継母が継子を懲らしめるために、担がせたということさ。